

ESSAY

DNA 医学と社会

崎山 樹

千葉県がんセンター研究所

もう何年か前のことになるが、高校の同窓会の折に、その当時巷でもそろそろ話題になりはじめていた「遺伝子治療」という言葉を聞いて、どういう印象を受けるかという問いを何人かにしてみた。50代前半で、大概是大きな会社でトップクラスにいる、日本全体の平均よりは知的なレベルもかなり高いと思われる連中である。彼らの大方の反応が「遺伝子をとりにかえるなんて」「神に対する冒瀆はできない」等などであった。

ことほどさように、多くの一般の人が正しくDNAというものを理解していると思えない。巷には組換え植物やDNA食品などのコマーシャルがあふれており、時に、新聞の三面記事でDNA鑑定による、犯人の割り出しや同定が話題になる。「ジュラシックパーク」が大当たりし、多くの人がDNAを話題にしたのは未だに記憶に新しい。しかも、いつの場合も言葉だけが通り過ぎて行き、跡に残るものが少ないと感じるのは私だけであろうか。

遺伝子研究が医学にもたらしたインパクトの大きさはここで触れるまでもないが、とりわけがんの基礎・臨床研究に及ぼしたそれは計り知れない。今後、がんの遺伝子診断や治療がもっと日常的なものになるという時を迎えてわれわれはどのように対処すればよいのだろう。遺伝子治療はともかく、診断はもうすぐそこまできている。本研究会の重鎮の一

人であられる馬場先生も深くかかわっておられる家族性腫瘍研究会が中心になって、いわゆる「家族性腫瘍における遺伝子診断の研究と応用のガイドライン」が策定され、日本癌学会で公開されたのが、つい昨秋のことである。その中でさまざまな問題が提起されているが、家族性ではない「がん」の場合も近似的な問題を抱えている。

昨今、がん治療の現場では、インフォームド・コンセントという言葉が氾濫し、これに意を払わない医師はいないが、多くの場合十分な説明（と医師は思っている）が終わった後で、よく聞く話は「緊張と不安で何を言われたのか実はよくわかりませんでした」である。これが、こと「遺伝子」ということになると、どうなるのか？説明を受ける側？説明をする側の問題？と考えればきりがなが、将来を見据えて、これらの問題はひとつひとつ整理していかねばならない。

科学研究の成果を一般社会の人にもきちんと理解してもらえるように説明する義務と責任、いわゆる科学者の accountability の問題は医学研究、就中遺伝子研究において最も重要性を示す。いうまでもなく、それは人間の生命や生活といった最も基本的な問題に大きくかわるからである。

アメリカの一般向け科学誌「Scientific America」と日本にあるそれと同じレベルに

あると考えられている科学誌の中味を見比べてみると、まず前者の内容は実に正確でかつ高度であり、これを一般の人が読むのかと時に驚かされる。私がアメリカに留学していた30年ほど前、アシュモフという名の科学評論家が数多くの書をしたため、科学の流れに対して時には鋭い論評を加えながらも、一般国民への知識の普及や啓蒙に努めていた姿勢を思い出す。同じ頃、今でも世界の生物学研究をリードするアメリカのコールドスプリングハーバー研究所が中学生を研究所に招いて野外を中心にした生物の実習を行っていたことも重なる。このような長年にわたる国民全体の知識の積み上げが、科学に対する正しい理解と洞察力を生みだし、現在のアメリカにおける先端的な臨床試験が可能になっていると考えるのは考え過ぎであろうか。

私たちのがんセンターでは、がんについての正しい知識を普及させるという主旨から、約10年前より病院の外来でのさまざまながんに関する解説パネルの展示や、地方紙ではあるが、新聞メディアを介してがんの解説記事の掲載をはじめている。内容は、各種がんの解説からはじまり、千葉県のがん罹患率の実態とその動きや治癒率の推移などである。新聞による啓蒙はともかく、願わくはがんでないことを願って当センターを受診した患者がセンターに入ったらいきなりこのようなパネルを目にすることを憂慮する向きもあれば、大いに助かるという前向きの声も聞こえる。2年前からは従来のパネルに加えて遺伝子診断と遺伝子治療についての解説パネルもそれに加わった。これまでのところ直接的な反応

は聞こえてこないが、外来で黙ってこれに見入っている患者さんや家族の方も少なくなく、責任を感じる。さらに、年1回がん予防展なるものを市内で開催し、ややもすれば腰が重くなる臨床医に出向いていただき、がんについてのさまざまな悩みをもつ街の声を聞く機会も設けている。家族にがんの者が多いが自分は？がんは遺伝するのか？などの質問がこの数年確実に増えている。

正しい知識を全国民的レベルで普及するためには学校教育に期待するところ大であるが、偏差値に追い回されている現在の教育システムにどこまで期待することができるだろうか。「まず隗よりはじめよ」である。当センター研究所に短期間ではあるが中学生を受け入れてDNA学習についてのカリキュラムを作成し、ごく初歩的な実習を行うことを計画している。

一方で、日本におけるマスコミの過剰な報道、地道でかつ継続的な報道の欠如も、遺伝子研究に限らずしばしば問題となる。数カ月前に、本会会長、千葉大学の磯野教授らを中心とした食道がんに対するp53による遺伝子治療の計画が全国紙で報道された。その記事の見出しは「食道がんの完治目指し！」である。末期の食道がんに対してp53導入による完治などありえない（少なくとも現時点では）のに、この始末である。記者はいう、「このようにセンセーショナルに書かないと、読んでくれませんので」と。現時点でのがんの遺伝子治療は完治のように劇的なものではないが、増殖を抑えQOLの維持には十分に役立つものであることを強調する記事の必要性を痛感するものの一人である。